

国立民族学博物館の収蔵品 27

みんなく展示の「触り」を体験しよう！



「世界をさわる」コーナーは、「じっくりさわる」「見てさわる」「見ないでさわる」の三つのセクションで構成されている。

「触り（さわり）」とは本来、芸能において中心となる見どころ・聴きどころ、あるいは話や文章の感動的な部分（要点）を意味している。ところが近年では、物事の最初の箇所というニュアンスでこの語が用いられることが多い。混乱を避けるために、本稿では前者を「触り」、後者を「さわり」と表記する。触りのさわりへの変化は、日本語表現の誤用の例として、しばしば取り上げられる。しかし、じつは「さわり≡触り」なのではないかと僕は考えている。触覚が直接とらえることができるのは、物の表面の質感である。この表層の情報を元に、物の内部を想像し、「目に見えない世界」にアプローチする。さわりから触りへ。これが触覚活用の醍醐味ともいえる。

二〇一二年、みんなくのインフォメーションゾーンに「世界をさわる」コーナーが新設された。僕は情報展示プロジェクトのメンバーとして、本コーナーの企画・設置に関わった。「世界をさわる」コーナー

は、みんなくの「展示場の無料ゾーン」に位置している。展示観覧の最初、もしくは最後に、誰もが気軽に立ち寄ることができるという点で、このコーナーは、みんなくのさわりである。老若男女、さまざまな来館者が展示資料に触れ、目で見ただけでは気づかないモノの形状・機能などを「発見」してほしいと願っている。

みんなくで展示されるモノの背後には、それを創り、使っている人、そして伝えてきた文化が存在する。創る・使う・伝える行為は、多くの場合、「手」を媒介としてなされる。言うまでもなく、表面的なさわりをきっかけとし、触りに到達してもらいたいというのが、「世界をさわる」コーナーの真の狙いである。みんなくでモノにさわるとは、各展示資料を持つ「目に見えない物語」、すなわち「創・使・伝」を追体験しているとも言えるだろう。多様な「創・使・伝」をいかにして展示するのか。みんなくの研究者は、日々この課題と格闘している。「世界をさわる」コーナーが、みんなく展示の触りへと来館者をいざなう導入になれば幸いである。

博物館でモノにさわるとは重要だが、そもそも触察は資料保存とは相容れない側面を有している。どんなに注意深くさわったとしても、触察により汚損・破損の危険が増すのは間違いない。これまでに「世界をさわる」コーナーでも、資料が壊れるという事故が何度か発生している。資料保存を重視するならば、博物館でモノにさわるのはタブーということになる。

逆説的な言い方になるが、「世界をさわる」コーナーは「さわるマナー」を育む拠点であると、僕は主張している。一つ一つのモノに優しく丁寧に接するのが「さわるマナー」である。モノの背後にある「目に見えない物語」を実感すると、必然的に来館者のモノとの接し方は変わってくるのではないか。「創・使・伝」の意義を理解すれば、モノを乱暴に扱うことはできないはずである。大量生産・消費が当たり前とされる使い捨て時代だからこそ、未来を担う子どもたちには「さわるマナー」を身につけていただきたいと思う。

「世界をさわる」コーナーの設置から五年が経過した。触察の楽しさを訴える展示、みんなくのさわりとして、本コーナーが来館者に受け入れられている手応えを感じる。一方、みんなくの触りを具現する点では、まだ道半ば、手探り状態と言わざるを得ない。「世界をさわる」コーナーを使用するワークショップなどを積み重ね、「さわるマナー」を広く館内外に宣揚していかなければなるまい。博物館で人とモノが触れ合う。そこで「さわるマナー」を習得した人が社会に出ていく。みんなくの「さわり≡触り」の現場から、者と物、者と者のコミュニケーションのあり方を再考する。「世界をさわる」コーナーは、そんな壮大な研究の出発点なのである。

（広瀬浩二郎）